



## 創刊への想い

編集長

とも しげ  
細川 友 茂

2014年2月9日、偶然机に置かれた「みやざき中央新聞」。色々な講演会の取材を通じて、いい話や感動する話を集めた新聞だった。

会社設立後、真っ先に宮崎県へ飛んだ。松田くるみ社長、水谷もりひと編集長、スタッフのみなさんが突然訪問した私を、本当に温かく迎えてくださった。「みやざき中央新聞と出会って、人生が変わりました。僕も感動する新聞を作ります。読者に希望を与える新聞を作ります」と素直な気持ちを伝えた。

水谷編集長から言われた言葉が忘れられない。「本当に良いものは、全国に広げないといけない。一緒に頑張ろう!」松田くるみ社長からは、手書きのメッセージをいただいた。「あなたのステキなシナリオを丁寧に生きてください」

創刊する「きぼう新聞」についての想いを少し書きたいと思う。人間関係の希薄さが増しつつある今だからこそ、活字を通して、人と人がつながり合っていく

という新聞の持つ役割はもっと見直されて良いと思っている。一人を大切に。そして、互いに支え合い、励まし合い、応援し合う社会。心豊かな人が集う、温かみのある社会の実現に向け、株式会社KIBOUを設立した。「きぼう新聞」は、魅力ある人物へのインタビュー記事、各種講演会取材して、面白かった話、感動する話、心温まる話、為になる話を講師の先生の許可をいただいて掲載する新聞である。人にフォーカスした、心揺さぶる新聞を作り続けたい。

私の祖父母、父母は、富山で新聞販売店を営んでいた。細川家の長男である私は、3代目として後を継ぐことがセオリーだったかもしれない。でも、父の後は継がなかった。今に思えば、心の中で、後悔があったのかもしれない。そして、偶然出会った「みやざき中央新聞」が人生を変えてくれた。

父に「起業する。きぼう新聞を作るよ」と報告した。面と向かって、父の顔を見ることはできなかった。そのとき隣にいた妻が、父の様子を教えてくれた。「お父さん、すごく嬉しそうな顔をしていたよ」

ふと思い出した。父が大切にスクラップしていた、私が写っている新聞記事。祖父の人生の物語が書か

れた新聞記事。そこには、大切な家族の歴史、物語、絆があった。笑顔で、自慢げにスクラップをしている父の姿が目につかんだ。

人の想いが新聞という形として残り、過去・現在・未来を繋いでいく。次は、私がみんなのことを新聞に取り上げ、届けよう。読者が、心豊かになる新聞、何か行動を起こすきっかけとなる新聞を作ろう。「生きる力」=「希望」の光を与える新聞を作ろう。新聞をみんなの大切な「宝物」へ。これが「きぼう新聞」誕生の物語。

大人が夢を持ち、その夢に向かって全力で走る姿は素敵だと思う。さあ、いよいよ創刊。

「きぼう新聞」が“100年後の子供達へのラブレター”となるように。



みやざき中央新聞の皆さんと一緒に